

ヘーゲル論理学における生命の理念

Die Idee des Lebens in Hegels *Wissenschaft der Logik*

竹 島 尚 仁

TAKESHIMA, Naohito

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要

第55号 2023年3月 抜刷

Journal of Humanities and Social Sciences

Okayama University Vol.55 2023

## ヘーゲル論理学における生命の理念

竹 島 尚 仁

ヘーゲル哲学を形づくる重要な枠組みとなっているものに、生命がある。われわれは生命と聞くとき直観的に動物や植物を思い浮かべ、たんなる物質や物体とを区別するであろう。しかしながら、ヘーゲルのいう生命は、このような区別を棚上げにするような生命概念を提示している。通常生命という言葉がそのような想起を誘うのであるとすれば、ヘーゲルの言う生命は、生命というより生きているという存在様式と捉える方がよいかもしれないし、また有機的関係と捉えるほうがよいかもしれない。いずれにせよ、そのような生命がヘーゲルに特徴的な思考様式に組み込まれていることは論を待たない<sup>1</sup>。

ヘーゲル青年期の思索において生命は、無限なものとして、有限的なものへと自分を分割しつつそれを統一するものであった。それはもっぱら神的存在を表現するために用いられていた<sup>2</sup>。イェーナ期においてヘーゲルは体系を志向するなかで精神にも重きを置くことになるが、イェーナ体系構想(1805/06)の思弁哲学のなかでも生命は確たる位置を占め<sup>3</sup>、『精神現象学』の序文で彼の哲学体系の基軸として実体-主体説を表明する際にも、実体の自己還帰的活動性を表すために「生きた実体」<sup>4</sup>という表現が登場する。ニュルンベルク期の理念論の試みには生命の理念が登場し<sup>5</sup>、『論理学』の理念論においては、理念の最初の形態として生命の理念が論じられる。『エンツェクロペディー』の論理学においても同様であるが、さらにその自然哲学においては、イェーナ期体系構想の自然哲学にも見られるとおり、自然から精神が登場する途上で、自然の最高の形態としての生命が有機体の概念のもとに論じられる。

このように、ヘーゲルの哲学的思考において生命は繰り返し登場し、その果たす役割は大きいと考えられる。そこで本稿では『論理学』を中心に生命の理念を考察するのであるが、生命の理念がどのようなものであるかを理解するうえで、生命の直観的な理解はしやすい反面、生命がどういう意味でどういう対象に用いられうるのかを整理しておかないと混乱をきたす可能性があると思われる

<sup>1</sup> H・マルクーゼは生命がヘーゲル存在論の根本的基礎であると主張した。H・マルクーゼ『ヘーゲル存在論と歴史性の理論』、未来社、1980年、207頁、とくに第二部。また久保陽一『生と認識』、知泉書館、第IV部第4章を参照。

<sup>2</sup> 例えば「キリスト教の精神とその運命」(細谷・岡崎訳『キリスト教の精神とその運命』、白水社、1998年、89頁以降)(TW1.370ff)。

<sup>3</sup> GW8.286。

<sup>4</sup> GW9.18。

<sup>5</sup> 例えば上級クラス用の哲学的エンツェクロペディー(1808/09)(GW10.75ff)。

る<sup>6</sup>。というのは、第一に、論理学において生命の理念で対象とされるのは、生物学的生命や、精神と合一した身体的生命とは区別される「論理的生命」に他ならないとされているからである。論理的なものとしての生命の理念自身は、自然の領域内部においては生物以外の自然物にも妥当しうるし、また精神の領域内部でも妥当しうると想定されているはずである。ところが実際の論述は、動物の生命をモデルとして進んでいるようにしか見えず、ややもすると自然哲学的な内容を先取してしまっているのではないかという疑念も生じるほどである。そうすると、生命の理念がそもそも論理学のうちに置かれること自体がふさわしくないのではないかという考えもでてくる<sup>7</sup>。その論述が、自然哲学における有機体論、とくに「動物的な有機体」の論述と重なるように見え、論理的な生命としての独自性を確保できないように見えてしまうからである。

また第二に、ヘーゲルの論理学において生命の理念が登場してくる経緯が、やや錯綜した筋立てになっているように見えてしまう。というのは、理念論に先立つ客観性の編において扱われる諸関係の妥当する領域とずれが生じているように見えるからである。客観性においては、機械的關係や化学的關係、そして目的論的關係という三つの関係が扱われる。前二者に関する論述では、その名の示すとおり、物質的な自然の過程が基本的なモデルとなっている。そこでは「自然必然性」<sup>8</sup>のもとで括られる関係性、すなわち外的な他者によって規定される関係性が捉えられている。しかしながら論理的な関係としては、自然領域のみならず精神の領域にも妥当するものとしても構想されている。たとえば、機械論的關係のもとでは、精神の働きとして機械的記憶や習慣、運命などが対象となりえ、化学的關係のもとでは愛や友情等々の精神的関係が対象となりうる。その意味で、たんに物質的な自然過程だけが射程となっているのではなく、自然領域と精神領域にまたがる論理学にふさわしい関係が論じられているとも言える。

<sup>6</sup> フルダは、精神の生命を理解しようとするなかで、生命の理念と絶対的理念の論述から少なくとも5つの生命の概念を区別している。すなわち、生命の理念、自然の生命、精神と一体となった生命、精神の生命、うつろわぬ生命 (unvergänglichliches Leben) (TW6.471-472, 549 (GW12.180-181, 236) を参照)、である。Hans-Friedrich Fulda, "Das Leben des Geistes", in *neu durchgesehener, ergänzter und/oder berichtigter Autorenfassung* (April 2014), in: <https://core.ac.uk/reader/32584770>. Erstveröffentlicht in: *Hegel-Jahrbuch 2006*. [以下 Fulda (2014)] S.3, 6を参照。そのうえでフルダは生命概念の複数性を主張し、すべての生命に共通の普遍的な生命概念は成り立たないと考えている。これに反してゼルは、方法的概念としての生命を主張し、弁証法的な概念の運動の脈動として生命を捉えようとしている。Annette Sell, *Der lebendiger Begriff*, 2. Auflage, Freiburg/München: Alber, 2014, 13, 21-22, 192ff.などを参照。

<sup>7</sup> F. Hogemann, "Einleitung", in: Hegel, *Die Lehre vom Begriff (1816)*, neu hrsg. v. H.-J. Gawoll, Felix Meiner: Hamburg, 1994, XIV. ホーゲマンによれば、K・ローゼンクランツは「ヘーゲル論理学の改作にあたって、機械的關係、化学的關係、目的論を論理学から形而上学に追放し、生命を自然哲学に、善を精神哲学に追放した」とされる。ここで形而上学はヘーゲルの客観的論理学に概ね対応し、機械的關係は化学的關係とともに本質論(原因論)の因果性の諸形態として居場所を移されたことになる (K. Rosenkranz, *Wissenschaft der logischen Idee*. In zwei Bänden. Erster Teil. Metaphysik, Königsberg, 1858, VIII-IX)。また V. Hösle, *Hegels System*, Felix Meiner: Hamburg, 1988, 240.

<sup>8</sup> TW6.438 (GW12.155) .

そして、二つの関係に続いて論じられる目的論では、自然必然性が支配する圏域と対比的に目的論的關係、とくに外的合目的性が論じられる。先立つ両関係のもとにある客観をその目的連関のうちで統一づけ、主観的目的が客観に対して外的に規定を行うような関係である。ところが、そこでは事柄の説明のために、手段としての鋤の利用とか、家とか時計といった例が散見されるのみであり、その点からすると、外的合目的性のモデルとなっているのは、われわれ人間の意図的行為だけであるように見える。そのかぎりでは自然必然性の支配領域に対比して自由の支配する精神領域に焦点が当たっているように見える。そのことは、実際にヘーゲルの目的論への導入においても、「決定論」あるいは「自然必然性」と「自由」あるいは「自己規定」との対比を通じて示されている<sup>9</sup>。しかしそのために、そもそも客観性における最初の二つの関係は自然領域のみならず精神領域にも妥当するものとして構想されていたはずであるのに、三つ目の目的論的關係では精神領域のみが問題となり、全面的な適用可能性が断たれているような論述に見えてしまう。

こうした客観性の論述を経て、主観と客観の統一としての理念が成立し、まずその直接的形態として生命の理念が論じられる。つまり自然と精神領域を射程とする機械的關係と化学的關係とが扱われ、それから精神領域を想定しているとまずは解釈できる、目的論の論述をはさみながら、ふたたび、自然と精神領域にともに妥当するはずと想定される論理的生命が論じられる。ところが実際には、生命の理念の論述は動物の生命だけを論じているようにしか見えないわけである。基本的な論述が、形態（化）と同化と類的過程の三点に集約されており、自然哲学において動物の生命を論じる場合と同様であるが、そのため生命の理念の射程が自然領域、しかもその一部に限られるように見えてしまう<sup>10</sup>。とはいえ、生命の理念は生物学的生命と区別される「論理的生命」を対象とすると明言されているし、実際に『精神現象学』序文の実体＝主体説においてもその生命性に触れられているとおり、精神の生命性はもちろん、ヘーゲルの哲学体系（学）の生命性は疑いようのないものである。

さらに生命の理念を理解するうえで困難に拍車をかけるのが、生命を論理学で論じなくてはならない理由として、認識を論じるのであれば生命を前提として論じなくてはならない、とヘーゲルが述べている点である。認識の理念は生命の理念に後続するのであるが、生命と認識とにどのような内的関係があるのか、直ちに理解することは難しいであろう。

以上のように、生命の理念が論理的生命を対象としていること、そして生命の理念とそれが前提する客観性の諸関係に関して、それぞれの論述モデルと実際の適用範囲が整然と噛み合っていない

<sup>9</sup> TW6.436-440 (GW12.154-157) .

<sup>10</sup> 『エンツェクロペディー』自然哲学・植物的な自然においても、理念論の生命の項への明示的な言及がある。Enzy3. § 346 (TW9.394) を参照。そして植物も、動物の場合と同様にこの三つの過程によって捉えられているが、植物は自己感情をもつことができないので、論理学の論述が念頭に置くモデルからは外れてしまう。Enzy3. § 347 (TW9.412) を参照。

ように見えること、そして生命の理念と認識の理念との関連性という論理学構成上の問題が、生命の理念の理解を難しくしている。

本稿は、『論理学』において論理的生命を生命たらしめる基準を見定めながら、以上の問題点を整理し、一定の見通しを立てようとするものである。

そのためにまずは、理念とは何かについて基本的なことをまとめておく (1)。そして生命の理念がどのようなものであるかを生命の理念の論述をもとに確認しておく (2)。そのうえで、生命が動物モデルによって論じられるなかで、論理的生命にとってその実在性はいかなるものであろうとするのか (3)、論理的生命の適用範囲と先行する客観性における諸関係の射程とが整合的であるのか (4)、後続する認識の理念との関連において、生命の理念の論述は妥当なものであるのか (5)、を考察する。

## 1. 理念とは

理念とはどのようなものであるかを理解するうえで重要になる基本事項ををまとめておきたい。

第一に、理念は「概念と実在性との統一」<sup>11</sup>、より詳しく「主観的概念と客観性との統一」<sup>12</sup>とされる。ヘーゲルは、例を挙げてこれを直観的に説明しようとする。

「国家がその理念に全く適合していない……自己意識をもつ諸個人であるところの国家の実在性が概念にまったく一致していないならば、国家の魂と国家の身体とは相互に分離されてしまっているだろう。……国家の概念は極めて本質的に個人の本性をなしているのであるから、この概念はきわめて強力な衝動として諸個人のうちにあり、それだから諸個人は、ただ外的合目的性という形式においてであろうと国家の概念を実在性へと移すようにと、またはそうして国家の概念を甘受するようにと迫られるのである」<sup>13</sup>。

われわれの心と身体とが一体であるように、国家の魂と国家の身体が一体となって、国家の理念が実現されることが示されている。ここでは国家の魂がその概念であり、国家の身体が国家を構成する諸個人である。そして国家の概念が、諸個人を外的に規定するすなわち強制するのではなく、個人の本性をなすというのは、それが個人の実体的な規定であることを意味する。その意味で、個人が国家から分離されてしまうと、「諸個人は没落せざるをえないであろう」<sup>14</sup>。逆に国家が国家として機能するのは、諸個人の活動のおかげであり、たとえば法秩序が実現されるのも諸個人がそれに従うかぎりではない。

このように、概念が客観の実体的規定をなしており、客観がそれを実現すべく活動することが、

---

<sup>11</sup> TW6.465 (GW12.175) .

<sup>12</sup> TW6.466 (GW12.176) .

<sup>13</sup> TW6.465 (GW12.175) .

<sup>14</sup> TW6.465 (GW12.175) .

理念的統一の意味に含まれている。ただ「客観性はまた同じく概念によって規定されかつ自分の実体性をあの概念のうちにのみもっていたのであった」<sup>15</sup> のだから、理念論に先だつ客観性の諸関係においても同様の統一が潜在的には成り立っていたと言えるかもしれない。しかしヘーゲルはそこに区別を設けている。客観性においては概念がその直接性に「沈み込んでいた」<sup>16</sup> のであり、そこでの概念規定は客観を十全に内在的に規定するものとはなっておらず、客観の直接性あるいはその外面性が概念による規定の外に残存していた。

形式的機械的關係においては、客観の衝突等は他の客観によって外的に規定されるのみで、客観の外面性は揚棄されるにいたらず、絶対的機械的關係においても、客観の実体的規定である重さ（重力）によって太陽系の天体の運動は内在的に統一的な規定をもってはいたが、「客観は中心点に対して自立的で外的な客観という現象をまだもっていた」<sup>17</sup>。化学的關係においては、客観は無反応なものではなく、本性的に他の客観に反応するものとして規定されており、そして、両者は中和されるべくあるものとして統一されていることが、それらの実体的な規定である。化学的客観の自己規定として、反応物質が中和されまた分解されるという過程を経るが、しかしながら、中和も分解もそれを開始させる条件が反応物質の外部に前提されてしまっていて、それぞれが単独で中和あるいは分解という過程を始めることはできず、そしてまた両過程は別々のものとして存立しているため、概念的統一を見えなくさせているという見立てである。目的論的關係は外的合目的性のことであるが、主観的な概念としての目的が客観を規定するとき、客観の外面性はなるほど揚棄されるとしても、手段としての客観を得るために別の手段が必要とされたり、実現された目的としての客観がまた別の目的のために手段とされたりする、というように目的による外面的な規定は終結することなく、目的自体が客観にとって外的なものであると同様に、目的に対して前提された客観の外面性はつねに立ち現れてくるものと想定されている<sup>18</sup>。

ところがここ理念論では「理念は今や、概念が客観においてそのなかへ沈み込んでいる直接性からふたたび自分の主観性へと解放された概念であることを示したのである」<sup>19</sup>。つまり概念の自己規定をよりよく体現するうえで、これまでの客観性の諸関係には客観の外面性がつきまっていたがゆえに、このような規定が十全に貫徹されずにとどまっていた、と言えよう。しかしいまや概念はその拘束から自由になり、概念の自己規定をより体現する客観が生命なのである。

第二に、こうして理念は自己規定するものとして捉えられる。先ほど見たように、すでに先行する客観性の三つの関係において概念が自己規定的原理として登場し、客観を規定していた。しかし

<sup>15</sup> TW6.466 (GW12.176) .

<sup>16</sup> TW6.466 (GW12.176) , TW6.271 (GW12.30) .

<sup>17</sup> TW6.428 (GW12.147) .

<sup>18</sup> これは手段として客観を規定するために、さらに別の手段が必要になるといった連鎖をも想定させるものであった。

<sup>19</sup> TW6.466 (GW12.176) .

それらの関係における客観は、自己規定的な原理を十全に体現する客観ではなかった。理念において、概念は自己規定するものとして、客観からある意味で自由な自立的存在になっていて、概念は概念として自己へと関係している。その反面として同時に概念でないものを客観として自分から区別し、そして同時にその客観に関係する。しかしその概念は客観を外からではなく、実体的に、内在的に規定しているのであるから、その規定が客観の「過程」として展開されてくると、そこに概念的自己の実現がなされることになる。ヘーゲルの言うところではこうである。「概念は真に自分の実在性に到達したことによって、つぎのような絶対的判断である。その主観は自己へと関係する否定的統一として自分の客観性から自己を区別しており、かつまた客観性の即かつ対自的な存在であるが、しかし本質的に自己自身を通じてこの客観性へと関係する、——それだから〔主観は〕自己目的でありかつ衝動である」<sup>20</sup>。このように概念は自己を規定して客観をいわば支配し、自己を実現しようとする。

したがって、客観性はまさに概念の外面性となっており、概念は客観の外面性をいわば余すところなく規定する。ヘーゲルはこう述べる。「客観性は目的の実在化であり目的の活動性によって定立された客観性である。この客観性は定立された存在としてその存立とその形式とをその主観によって貫徹されたものとしてのみもつ。客観性は、客観性として概念の外面性という契機を自分のものにもっており、それゆえ一般に有限性、可変性、現象の側面である。……この外面性は概念によって規定されたものとしてのみあり、また概念の否定的統一へと受け入れられている」<sup>21</sup>。理念に先立つ客観性においては、客観性のこの外面性が概念によって規定されつくすことはなかった。しかし理念では客観が完全に概念によって規定されたものとして捉えられており、それはその客観において概念的自己が実現されているからである。客観の外面性は否定されながらも保存されて、概念の契機となっている。もちろん客観性における三つの関係も排除されるのではなく副次的な規定となっており、概念はそれらの関係に覆いかぶさるようにして客観を重層的に規定するのである。

第三に、概念による規定の包括的なあり方はこのとおりであるが、客観の外面性が内在的に十全に規定されていることは、理念における客観が概念的構造連関を具えるところに現れる。概念の諸契機すなわち普遍性、特殊性、個別性は、それらが展開される理念の過程のなかでそれらに対応する客観の在り方が示されなくてはならない。つまるところ、概念論の主観性の編で論じられたような、概念が本来もっている主観的構造、最終的には推論構造が客観に即して顕わにされなくてはならない。これはある意味で客観性においてもなされているのであるが、先ほど述べたように、概念が客観の外面性を規定しきることはなかったわけである。

第四に、理念の自己規定性から派生することであるが、理念が内的合目的性をもつという点も見

<sup>20</sup> TW6.466 (GW12.176) .

<sup>21</sup> TW6.467 (GW12.176) .

落とされてはならない<sup>22</sup>。理念に先立つ客観性において、機械的關係、化学的關係、目的論的關係（外的合目的性）が論じられたが、そこで明らかになったのは、先に見たとおり、概念によって規定されながら客観の外面性がそれによって完全に規定されることはないということであった。「現実的な諸物は理念に一致しておらず、……諸客観の各々は自分の領域が異なるのにしたがって、また客観性の諸関係において機械的であったり、化学的であったり、あるいは外的目的によって規定されたりしている」<sup>23</sup>。ヘーゲルは、客観性において「理念が自分の実在性を完全には仕上げなかったということ、自分の実在性を不完全にしか概念に従属させなかったということの可能性」<sup>24</sup>を見ている。彼はこのことを踏まえて客観性全体についてこう述べる。「有限な事物がこの有限性の側面にしたがって到達する最高のものは外的合目的性である」<sup>25</sup>。それを超える概念による規定のあり方というのは、客観の外面性が内在的に十全に規定される、内的合目的性に他ならない。理念は自己規定するものとして、客観において端的に自己実現するものである、と言ってよいであろう。

## 2. 生命の理念とは

理念の基本的なあり方が以上のものであるとすると、最初の理念の形態として登場する、生命の理念はどのようなものであろうか。

第一に、生命の理念は「直接的理念」だとされている。

「概念は対自的に概念として現実存在してはいない。概念はこうして魂なのであるが、しかしこの魂は直接的なものという仕方では存在している。すなわち魂の規定性は魂そのものとしてあるのではなく、魂は自己を魂として把握しておらず、自分自身のうちに客観的実在性を持っていない。概念はまだ魂のこもって (seelenvoll) いない魂としてある」<sup>26</sup>。

ここで概念は自己に自己を対抗させて対自的に概念として存在しているわけではない。つまり概念は自己意識として自己を把握していない。このような概念は「認識の理念」あるいは「精神の論理的な理念」という理念のつぎの形態となる。ここでは概念は、認識するものとして自分のうちにすなわち思考のうちで対象化される実在性をもっているのではなく、自分の外の客観のうちに実在性をもっている。それが理念が直接的にある形態、直接的理念だとするのである。

第二に、生命は概念として自己規定する。まず、生命ある主観とその過程が、前節で述べたような理念の一般的な範型にしたがって説明される。「生命は即かつ対自的に絶対的な普遍性である。生命が自分のもとにもっている客観性は概念によって端的に貫徹されており、この客観性はもっぱ

<sup>22</sup> 内的合目的性が機械的關係と化学的關係に還元される機能的な性質に過ぎないのかどうかという問題は本稿では立ち入らない。次節に見る生命の理念についても同様である。

<sup>23</sup> TW6.465 (GW12.175) .

<sup>24</sup> TW6.465 (GW12.175) .

<sup>25</sup> TW6.465 (GW12.175) .

<sup>26</sup> TW6.468 (GW12.177) .



ら概念を実体としてもっている」<sup>27</sup>。「概念は生命において遍在的な魂である。そしてこの魂は客観的存在のなかでひとつであり続ける」<sup>28</sup>。「客観性の外面性のなかでの、すなわち原子論的物質の絶対的数多性のなかでの概念の統一」<sup>29</sup>である。このように生命的概念は一般的に客観の外面性を統一づけているのであるが、それだけではなくまた「主観的な実体としては衝動」<sup>30</sup>であり、「特殊な区別」<sup>31</sup>すなわち身体の諸分枝を生み出しつつ、「この特殊化を統一へと導き返し、統一のなかでこの特殊化を維持するのである。生命は自分の客観性と特殊化とのこの否定的統一としてのみ自己へと関係する生命、自立的に存在する生命、すなわち魂である」<sup>32</sup>。

生命の理念における論述としては、まず、このような統一体として「生命のある個体」に焦点が当てられる。生命のある個体は「魂としての生命」<sup>33</sup>であると同時に、客観的な「身体性」をもつ存在である。魂は「〔みずから〕始め自己運動する原理」<sup>34</sup>である。そして生命の魂は、定立されたものとしての「客観的存在を自分自身のもとにもっている」<sup>35</sup>。それは「目的に従属した実在性、すなわち直接的な手段」<sup>36</sup>であり、「それ自身が実現された目的であって」<sup>37</sup>、もし身体の部分が「機械的または化学的な所産として」<sup>38</sup>捉えられるなら「生命あるものが死んだものとして捉えられる」<sup>39</sup>ことになってしまう。「概念は生命あるものにとって内在的であるのだから、生命あるものの合目的性は内的な合目的性としてとらえられるべきである」<sup>40</sup>。「生命あるもののこの客観性が有機体 (Organismus) である」<sup>41</sup>。

このことは、生命のある個体の概念的な諸契機、すなわち普遍性、特殊性、個別性が身体においてどのような役割を果たしているかによって具体的に説明される。つまり概念の諸規定に対応するかたちで、「生のある個体の実在性」<sup>42</sup>がどのような機能とそれを支える組織に「分節化されている (insectum)」<sup>43</sup>のかが説明される。このような形態化として、感受性 (Sensibilität)、刺激反応性

<sup>27</sup> TW6.472 (GW12.181) .

<sup>28</sup> TW6.472 (GW12.181) .

<sup>29</sup> TW6.472 (GW12.181) .

<sup>30</sup> TW6.473 (GW12.181) .

<sup>31</sup> TW6.473 (GW12.181) .

<sup>32</sup> TW6.473 (GW12.181) .

<sup>33</sup> TW6.475 (GW12.183) .

<sup>34</sup> TW6.475 (GW12.183) .

<sup>35</sup> TW6.475 (GW12.183) .

<sup>36</sup> TW6.475 (GW12.183) .

<sup>37</sup> TW6.476 (GW12.183) .

<sup>38</sup> TW6.476 (GW12.184) .

<sup>39</sup> TW6.476 (GW12.184) .

<sup>40</sup> TW6.476 (GW12.184) .

<sup>41</sup> TW6.476 (GW12.184) .

<sup>42</sup> TW6.478 (GW12.185) .

<sup>43</sup> TW6.478 (GW12.185) .

(Irritabilität)、再生 (Reproduktion) が挙げられている。感受性はさまざまな印象を受け取り感情をもつ。刺激反応性は自己保存に関わる「生命ある抵抗力」<sup>44</sup> であり、再生は代謝などによる自己の回復や成長に関わる。これらの機能によって身体が有機的に組織されていることが述べられる。生命は、それぞれ別の機能を担う諸分枝や諸器官を分化させ、そして相互に関連させつつ、ひとつの個体としてそれらの自立性を否定しつつ統一している。また、諸分枝はたんなる手段ではなく実現された目的でもある。つまり各分枝がそれぞれ全体の目的すなわち生命を内在化させており、それが失われると個体全体の生命も止んでしまうような存在である。これが魂による身体の有機的組織化のより具体的な描像となっている。

以上のような、生命のある個体内部における形態化の過程の説明について、第二にその個体が外的な客観的世界を前提し、それに関係するという過程が取りあげられる。それは「欲求」と深く結びついている。生命のある個体は「自己目的」をもつ主観として外的世界の非自立性を「確信」している。その確信のもとで「自己を維持し」「自己を客観化しようとする衝動」<sup>45</sup> をもつ。生きた個体はこの世界から身を守ったり、またこれを摂り込んだり、道具として用いたりすることによって、その世界の「空無性」<sup>46</sup> を示す。このうち栄養摂取による同化は再生と密接に関わっている。また感情においても、生きた個体は、本来的には外界からの影響を機械的に受け止めるのではなく、「客観は原因として作用するのではなく、生命あるものを刺激する」<sup>47</sup> とされる。

とくに同化の過程、たとえば摂食などにおいては、理念に先行する客観性の諸関係による規定と生命の自己目的による規定との関係性が明らかになっている。生命のある個体は、手段として客観的身体を用いながら外的客観にかかわり、機械的關係と化学的關係に入り込む。この外的客観は、生命のある個体の主観的欲求 (目的) によって外的に規定されてもいる。しかしこのような過程の産物は、最終的に食物が消化され身体に摂りこまれることで、生命のある個体の一部となる。「客観が支配されるとともに機械的過程は内的過程へと移行するのであり、この内的過程を通じて個体は客観を自分のものにする。個体は客観からの固有の性状を取り去り、客観を自分の手段にし、自分の主観性を客観に実体として与える」<sup>48</sup> のである。

最後に、生命の類の存続にかかわる過程が取りあげられる。これは、性別の異なる個体によって新たな個体が生み出されることに関わっている。これによって、生命のある個体の実体をなす、生命という普遍的概念あるいは類の本質が「通常の知覚にとって現存している」<sup>49</sup>。つまり子の現存が類の現存を形づくり、子孫の存続が類の存続となる。

<sup>44</sup> TW6.479 (GW12.186) .

<sup>45</sup> TW6.481 (GW12.187) .

<sup>46</sup> TW6.480 (GW12.187) .

<sup>47</sup> TW6.482 (GW12.188) .

<sup>48</sup> TW6.483 (GW12.189) .

<sup>49</sup> TW6.485 (GW12.190) .

第三に、生命の理念が概念的構造とりわけ推論構造をもつという点については、以上の要約のなかでその一端が示されただけである。残念ながら、生命の理念の論述においては、生命としてとるべき推論構造の明示的な説明は見られない。客観の内なる推論構造の明示という点では、客観性の編において、絶対的機械的關係を論じるなかで推論構造がはっきりと示され、その三重性が語られていた。つまり普遍性、特殊性、個別性がそれぞれ他の契機を媒介する中間項となるのであり、全体として概念の統一的な規定のあり方を述べようとしていた。具体例としては、惑星系と国家に即して推論構造が示されていた。これは『エンツュクロペディー』198節（論理学・概念論・客観の絶対的機械的關係）においてもそれに似た推論構造が繰り返されている<sup>50</sup> とおりであり、4節でも確認するが、「三重の推論」<sup>51</sup> が「有機的組織〔有機的關係〕(Organisation)」<sup>52</sup> を真に理解するために不可欠だと述べられている。

『エンツュクロペディー』217節（論理学・理念の生命）においても、「生物 (Lebendiges) は推論であり、その推論の諸契機そのものがそれら自身において自らまた体系であり推論である」<sup>53</sup> と述べられてはいるが、先の198節などへの参照指示<sup>54</sup> があるのみであり、生物の諸過程に即した推論構造は明示化されていない。とはいえ、生物が形態化、同化、類的過程という「三つの過程を経過して自己を自己と連結する過程である」とされていることから、それぞれの過程が推論をなすのであり、おそらく推論の媒介項は、形態化では特殊性としての諸分枝、同化では個別性としての非有機的自然、類的過程では普遍性としての類となることが推測されるであろう。

以上のように、生命の理念について、生命個体において身体が有機的に組織化されていること、そして外的世界に関しても自己維持することを目的として振舞うこと、個体の産生において類が存続することが示されている。そして生命が理念であることは、主観が実在性あるいは客観に内在的に自己規定し、自己実現する過程として捉えられることによって示されたのである。

### 3. 生命の理念の問題 (1) —— 論理的生命にとっての実在性

以上、理念そのものと生命の理念について捉えられるべき点を簡単に見てきた。ここで最初に提示した問題点に戻ることにしよう。生命の理念の議論で気づかれるのは、たとえば自己感情を取りあげ、雌雄別個体を念頭におき性別について言及していることから、ヘーゲルは、生物とりわけ

<sup>50</sup> ハイデルベルク期の『エンツュクロペディー』初版では147節 (GW13.91)。

<sup>51</sup> Enzy3. § 198 (TW8.355, 356) . Enzy1. § 147 (GW13.91) .

<sup>52</sup> Enzy3. § 198 (TW8.356) .

<sup>53</sup> Enzy3. § 217 (TW8.374) .

<sup>54</sup> 198節のほか、201節（論理学・概念論・客観の化学的關係）、207節（論理学・概念論・客観の目的論）への参照指示がある。

雌雄を有する典型的な動物を、生命理念のモデルとして用いているということである<sup>55</sup>。しかしヘーゲルが論じようとしていたのは、論理的生命であったはずである。「生命の理念そのものは生命は、それが自然的生命である場合と精神との関係のうちにある場合という二つの場合においては、外面性という規定性を、前者の場合には自然の他の諸形態であるところの自分の諸前提を通じて、また後者の場合には精神の目的と活動性とを通じてもっている。〔ところが〕生命の理念そのものは、上述の前提された客観性や制約する客観性から自由であり、同様にまた〔精神の目的と活動性という〕この主観性への関係からも自由である」<sup>56</sup>。

この表明は、自然の生命や精神と合一した生命すなわち身体的生命が、自然哲学や精神哲学における実在的な過程において論じられる生命を前提しないという意味に理解できるであろう。しかしながら先ほど見たように論理学の論述は、むしろ自然哲学における「動物的な有機体」の論述に重なるものを顕著に含んでおり、それをモデルとして述べられている。

しかし主観的な概念に対置される実在的な側面はすべて自然哲学もしくは精神哲学に属するものであると考えられるからといって、実在的なものを理念からはぎ取っていこうとすると、理念は概念と実在性との統一であるのだから、理念そのものの拠って立つところが崩れてしまう。とすればひとつの方向性として、生命の理念を論理学から放逐するのみならず、理念をそのものを放逐することが考えられる。しかしそうだとするとそもそも主観的な概念が客観性とどうかわるかを示すために、実在的な側面に全く言及できないということにもなり、理念はおろか客観性の論述も論理学から放逐することになりかねない<sup>57</sup>。行きつくところは主観性の編で示された概念構造とりわけ推論構造のみが有機的な関係を示すものとなるであろう。仮にそれが正当であるとしても、ヘーゲルの観念論のプログラムとしては、自己規定的な概念的構造の妥当性を客観性において示すことはできなくなってしまう事態になる。となれば、論理学においても概念の自己規定的な運動のあり方を示すかぎりにおいて、実在的な側面に言及することを認めざるをえない、というのが彼の観念論のプログラムにとって妥当な方向性なのである。つまり、生命の理念において生命の実在的に具体的な展開は自然哲学に譲らざるをえないが、一定程度の実在性への言及は許されざるをえない、ということになるだろう。

とはいえ、そもそもどのような基準をもってどの程度まで実在的な内容を論理学に取り入れて、論理的生命を仕立てるのは、生命の理念の論述を見るかぎり明確にならないように思われる。あえて言うなら、動物の生命に特有の自己感情や雌雄別個体等々を交えず、生命のより普遍的な範型、

<sup>55</sup> 『エンツェクロペディー』の自然哲学では、植物には形態化や再生、同化、そして類の過程も認められるが、ヘーゲルの論述中に出てくる（自己）感情や欲求からすると、植物は生命のモデルとして想定されていないと考えられる。Enzy3. § 346-348.

<sup>56</sup> TW6.472 (GW12.181) .

<sup>57</sup> 註7を参照。

地球にも植物にも当てはまる生命過程をより抽象的に扱ったほうがよかったのではないかと思われる<sup>58</sup>。しかしそれでも抽象化し足りないのではないかと思わせるのは、ひとつには客観性において生命ではないにせよ生命に類似する過程の先取りが見られるからである。

#### 4. 生命の理念の問題 (2) ——先行する脈絡と生命の適用範囲

『論理学』の客観性の議論では、最初の二つの関係性すなわち機械的關係ならびに化学的關係は、自然領域と精神領域を射程としていた。機械的關係においては「圧力、衝突、牽引など、また寄せ集めと混合」<sup>59</sup>という自然領域の關係が対象であるのはもちろんのこと、「機械的な表象の仕方、機械的な記憶、習慣、機械的な行動の仕方」<sup>60</sup>、また「客観に対する強制力としての威力」をもつ「運命」という精神領域の事例も視野に入っている。化学的關係においては、自然領域の事象として気象学的關係への言及があり、また生物に関して性的關係への言及がある。精神領域の事象については、人格を「自己にだけ關係している塩基 (Basis)」と捉えたり、化学的關係の図式が「愛や友情等々の精神的關係にとってもまた形式的基礎をなす」<sup>61</sup>とも述べている。

これに対して目的論的關係では、序で触れたとおり、精神領域の事象を、とくに人間の意図的行為だけをモデルとしているように見えていた。目的論的關係が自然領域のうち物理・化学的領域にも及ぶ可能性がある——この可能性を考えること自体奇異に思われるであろう——のかどうかは判然としないところがある。『論理学』の客観性に対応する『エンツュクロペディー』の箇所を見てみたとき、たとえばその第二版で機械的關係を拡張して、下位区分として「反応的 (different) 機械的關係 (欲求、落下、社交衝動など)」<sup>62</sup>が組み込まれた。化学的關係に先立って機械的關係のなかに他の客観と反応することを本性とする客観の在り方をおいていることになるが、反応的機械的關係が欲求や社交衝動を射程としているとするなら、それが何らかの意味で目的論的關係と関連していることは否定できない。また化学的過程については、『論理学』において、媒質中に置かれた物質が相互に反応し合おうとするところに「外へと向かう衝動」を認めている。また『エンツュクロペディー』(自然哲学・化学的過程)では、化学的過程が本来の生命過程ではないとしても、ある意味で生命であることを述べる<sup>63</sup>文脈のなかで「ある種の化学的現象……を説明するために、化学では合目的性という規定が適用されるに至った」と、当時の化学研究事情の一面を肯定的に捉

<sup>58</sup> フルダは、ヘーゲルが論述に用いた自然の生命である動物モデルから、理想化された仕方で読み取られうる、純粋な生命を見てとろうとしている。ただ、その生命概念の特性が明らかにされているわけではない。Fulda (2014), S.5.

<sup>59</sup> TW6.426 (GW12.145) .

<sup>60</sup> TW6.410 (GW12.133) .

<sup>61</sup> TW6.429 (GW12.149) .

<sup>62</sup> Enzy2. § 196 (GW19.19.158) , Enzy3. § 196 (TW8.355) .

<sup>63</sup> 先に引用した Enzy3. § 335 (TW9.333) .

えている文言も見られる。

ここでは、この方面についてこれ以上検討できない<sup>64</sup>が、少なくとも自然領域のうち有機体については、地球や植物は措くとしても、動物に目的論的關係を認めることは不自然なことではない。実際に『エンツェクロペディー』（自然哲学・有機的な自然学）の動物の有機体について述べていることによれば、欲求や本能は、規定された内容を目的としてもつものであるとしている<sup>65</sup>。そして生物の内的合目的性の理解を困難にしているものとして「あたかも目的というものがただ意識された仕方でのみ存在するものであるかのような臆見が支配している」ことを、ヘーゲルは指摘している。これらの点から、動物が本能的な欲求しかもたないとしても、基本的に目的論的關係の射程に入ることは明らかであろう。

以上、『論理学』の客観性の三つの關係がモデルとしている領域は、その論述に現れている外見とは異なり、すべてが自然領域ならびに精神領域の事象に及ぶということができる。その意味で、客観性を完全な自然領域の縮図であるとみなし、自然哲学と同じ展開であるかのように、その集大成として生命が扱われるという見取り図は単純すぎるということになる。

ついで生命の適用範囲について見ておこう。客観性に続く生命の理念の論述が動物の生命をモデルとしていることは、すでに述べた。3節で述べたとおり、論理的生命について論述するにしても、それが理念である以上何らかの实在性に触れないわけにはいかないことから、とりあえずもっとも手近な動物の生命を取りあげたのだろうと考えられる。

しかし実際には、自然の生命の事例は他にも多数ある。『エンツェクロペディー』の自然哲学を見ると、植物的な有機体、さらに遡って地衣類やゾウリムシのような微小な生命体もまた生命であるとしていることが分かる。

そしてすべての生命を包み込む有機体である地球もまた生きて見なしえたと言えるかもしれない<sup>66</sup>。他にも本来の生物とは言えない客観について、生命に類似的な有機的關係を見出そうとしている。たとえば『論理学』客観性の絶対的機械的關係のところでは扱われた惑星系も、たとえば太陽を絶対的中心として、その重力という「自己規定的な統一」を「自己運動の原理」とし、それによって一定の法則のもとに諸惑星を規定しているようなシステムだと見なされていた。そこには

<sup>64</sup> 化学的過程と生命の關係について、加藤尚武「有機体の概念史」を参照（『シェリング年報』11巻、2003年、4-15頁、所収）。

<sup>65</sup> Enzy3. § 360 (TW9.472f) .

<sup>66</sup> 最初の普遍的な有機体として地球が挙げられている (Enzy3. § 338 (TW9.342)) が、地球は「生物 [生きたもの] (Lebendiges)」とされてはいない。最初に「生を吹き込まれた (belebte) 有機体」(Enzy3. § 338 (TW9.342)) とされているのは植物である。地球は、地質学的な形成過程が止んだものとして「生命の結晶」ではあるが「死んだまま横たわっている有機体」(Enzy3. § 341 (TW9.360)) である。气象学的過程も「地球の物理学的な生命」(Enzy3. § 286) ではあっても、地球がその過程に入り込むことはないと言われる。とはいえ、地球が太陽系の形成過程、地球の大陸・大洋の形成過程などを終結したとは言えないわけだから、地球はまだまだ生きていと言えなくはないであろう。

「死んだ機械的關係」<sup>67</sup>ではなく、魂を吹き込まれた<sup>68</sup> 關係性がある。そしてこの關係性に対応する『エンツュクロペディー』の箇所には「ひとつの全体がその有機的關係 (Organisation) において真に理解されるのは、このような連結の本性、つまり同じ三つの項からなる推論のこのような三重性によってのみである」<sup>69</sup>、との言もある。したがって、惑星系が一種の有機的關係をもつものとヘーゲルが見なしていた、と考えることができる。

同様のことが化学的關係についても指摘できる。『エンツュクロペディー』の自然哲学では、「有機的な自然」の直前にある「化学的過程」のところで「化学的過程は一般的に生命である。というのは、直接的な状態にある具体的な物体が揚棄されるとともに、再びまた生み出されるからである」<sup>70</sup> と言われている。ヘーゲルがここでも見出そうとしているのは、概念による自己規定的原理である。つまり反応する物質は相互に反応して中和されるべく存在しているのであり、両物質に対する全体を規定する原理が概念とみなされている。その概念が中和と分解の二つの過程によって実現されているというわけである。しかし、生命の過程との違いは、中和と分解の過程は何か外的な制約条件のもとでしか開始されないというところにある。しかしそうであっても、ヘーゲルにとって反応物質の統一概念が自己規定的であることの方が重要であり、その実現過程のうちに三重の推論構造を指摘することで、有機的關係の存在を示唆していることは明らかである<sup>71</sup>。

実に『論理学』客観性の三つの関係のいずれにおいても、生命に特徴的な自己規定的原理や推論構造が示されているのであり、また『エンツュクロペディー』(論理学・理念)の生命においては、先行する客観性の諸関係すなわち機械的關係、化学的關係、目的論的關係における推論構造への参照指示が明確に行われている<sup>72</sup>。

つまり、このように生命あるいは生命(に類似)的なものの適用対象が、国家や学的体系のような精神領域の対象は言うまでもなく、生物から非生物にまでも拡大するのは、生命が自己規定的原理をもつことにはじまり、客観における概念的自己の実在化の過程のうちで三重の推論構造をとると見なせることを範型として、それを広く他の事象に適用することに起因すると考えられる。その結果、一般に生命とは呼ばない対象もまた(半ば)生命であると言えるようになっている。

結局のところ、ヘーゲルにとって、どのようなモデルが適切なのかとか、適用される事象がどのような領域のものでありうるのか、といった問題に考慮を払う以上に、客観性から理念への進行の主たる関心は、自己規定的概念の実在化の程度が高次化していくことを追跡することにあつたので

<sup>67</sup> TW6.427 (GW12.146) .

<sup>68</sup> 「この魂を吹き込むもの (dieses Beseelenden) [たとえば太陽系の太陽] の規定性が……法則である」(TW6.427 (GW12.146)) .

<sup>69</sup> Enzy3. § 198 (TW8.356) .

<sup>70</sup> Enzy3. § 335 (TW9.333) . また Enzy1. § 259 (GW13.154) .

<sup>71</sup> Enzy3. § 334 (TW9.330) . ここには § 198の絶対的機械的關係の叙述への参照指示も見られる。

<sup>72</sup> Enzy3. § 217 (TW8.374) .

あろう。それは、客観の外面性あるいは自立性が揚棄されること、つまり客観が概念的統一によって規定された一要素として現れ、自立性を剥奪された観念的な存在にすぎないこと、それと同時に概念の自己規定的活動が客観に対してより内在的に入り込み、客観の外面性はその規定の制約としてより現れなくなることを意味する。それが、どのような事例であろうと、内的合目的性という関係性を体現する何らかの生命を取りあげることで果たされれば十分であって、その生命においては、この概念的統一が、客観性の三つの関係性より高次の規定であり、有機的分肢の形態や活動の維持や類の存続というあり方においてそれらを支配するというを示すことが重要なであろう。

### 5. 生命の理念の問題 (3) ——後続の「認識の理念」につながる脈絡

以上の問題は、生命の理念に先行する連関から見たものであるが、それに対して生命に後続する連関すなわち認識の理念との連関からも見ておきたい。ここで指摘されるのは、実はヘーゲルは、3節で述べた、実在性の先取りという問題を想定していたのかもしれない、ということである。あらかじめ理念において生命を論じるのはつぎのような理由からであると、ヘーゲルは申し立てている。論理学が「空虚な死んだ形式以外のものを含むべきではないとすれば、論理学においては一般に理念とか生命とかいうような内容は全く問題になりえないであろう。だが絶対的真理が論理学の対象であり、そして真理そのものは本質的に認識のうちにあるのであれば、少なくとも認識が取り扱われなければなるまい」<sup>73</sup>。そして、認識は論理学に属するものとして、精神哲学の対象となるような人間学的、精神現象学的、心理学的な諸前提をもつべきではなく<sup>74</sup>、「それ自身が理念であるところの前提だけが論理学では取り扱われるべきである」<sup>75</sup>とされる。これら二つの前提から、直接的な理念としての生命の理念が取り扱われなくてはならないとするのである。

まず、真理は認識されるものであると、言われている。しかしここで真理というのが理念における真であるなら、それはたんに思考と対象が一致するということではなく、対象の構造が概念的構造をとるということである<sup>76</sup>。真理の認識が問題になれば、認識の対象もまた理念的なものでなくてはならないことになるが、認識の対象が生命に限られるのかどうか、分かりにくいところである。おそらくヘーゲルは、主観的な概念が客観において自己規定的で自己実現的な概念的構造を示すことが示されるということが、ともに理念である生命においても認識においても成立しているわけであるから、その概念的構造が直接的に客観において存在している理念と、概念そのものを自己反省的に対象とする理念との違いにもとづいて、直接的な理念として生命を先行させたのであると言え

<sup>73</sup> TW6.469 (GW12.179) .

<sup>74</sup> TW6.470, 496 (GW12.179, 198) .

<sup>75</sup> TW6.470 (GW12.179) .

<sup>76</sup> 「すべての現実的なものは理念を自己のうちにもちかつ理念を表現するかぎりでのみ存在する。対象、すなわち客観的ならびに主観的世界一般は理念とただ合致すべきではなく、それら自身が概念と実在性との一致である。」(TW6.464 (GW12.174))



よう<sup>77</sup>。そのような差別化を、ヘーゲル流に考えるなら、より低次あるいは高次の理念の形態として体系化したかったのであろうと考えられる。

このような形式的な連関に加えて、内容的な連関で見ると、自然の最高の形態としての生命から精神が出現するという脈絡を見て取ることもできよう。認識を扱うということは、翻って精神を扱うことでもある。論理学の認識の理念において扱われるのは「精神の論理的理念」<sup>78</sup>だとされている。生命の理念から認識の理念への移行にあたっては、「性交において生命のある個別性の直接性は死滅する。この生命の死は精神の出現である」<sup>79</sup>と述べられている。『エンツュクロペディー』の自然哲学においても個体の死を通じて「概念は、自己にふさわしい実在性を、すなわち概念をその定在としてもつ。これが精神である」<sup>80</sup>というように、精神の出現が語られる。

このような観点からすると、生命は自然領域のうちに置かれ、生命の概念的魂が客観に沈み込んだ状態であったとしても、そこに概念的統一が認められることにおいて「概念の対象が概念そのものである」<sup>81</sup>という認識のあり方へと進むという仕方で、精神が生命に後続する理念として扱われることになる。いわば認識あるいは自己意識を欠く生命から、認識あるいは自己意識のある生命へと続くのである。自然からの精神の生成を語るうえで、生命をあいだに挟むことはヘーゲルにとって必須のものであったと言えるかもしれない。

しかし生命の論述において、動物の生命だけがモデルとして選択された偶然性は、そのような生成の脈絡の必然性をむしろ弱めてしまっていると思われる。しかも、論理的生命を論じるというのであれば、自然的生命のみならず精神的生命（たとえば「精神的生命として」<sup>82</sup>の国家）への言及、さらには絶対的理念における弁証法的な概念の活動性としての「うつろわぬ生命」への言及も必要であったと考えられる<sup>83</sup>のであるから、自然から精神へ、という脈絡に縛られる必然性も見えないのである。

<sup>77</sup> TW6.487 (GW12.192) を参照。判断による理念の二重化、すなわち「概念そのものが自分の実在性であるところの主観的概念と生命としてあるところの客観的概念へ」の二重化が語られている。この二重化のもとに認識の理念（あるいは精神の理念）が構成されている。『エンツュクロペディー』223 - 224節においても、同様に生命の理念と認識の理念との緊密な関係性が示されている。理念の根源分割として、主観的理念にとって客観的理念が眼前にある直接的世界として現れ、そのうちに現象するものとして生命の理念が位置づけられている。

<sup>78</sup> TW6.496 (GW12.198) .

<sup>79</sup> TW6.486 (GW12.191)、また Enzy3. § 222 (TW8.377) .

<sup>80</sup> Enzy3. § 376 (TW9.537) .

<sup>81</sup> TW6.487 (GW12.192) .

<sup>82</sup> Enzy3. § 539 (TW10.331) .

<sup>83</sup> もちろんこれはこれで、3節と4節で述べたような生命の実在性の度合いと適用範囲に関わる問題を生む。論理的生命が自然の生命、精神の生命、方法論的生命のいずれにも当てはまる内容をもつなら、それはどのようなものになるか。生命の理念の実在性を薄めていくと、方法論的生命に行きつかざるをえないであろう。すると論理的生命と方法論的生命の区別はなくなってしまうかねない。フルダはそうならないように「生命の概念化の複数性」を主張して、直接的理念としての論理的生命を自然領域に留めおき、精神の生命と区別する。Fulda (2014) を参照。——さらに言えば、神の生命、芸術作品の生命への言及も求められるところであろう。

## 6. 結び

理念とは、一般に自己規定的な概念が客観を内在的に十全な仕方です規定するものであり、その一つの形態として生命が取り上げられた。そして生命の活動は形態化、同一化、類の再生という三つの過程として繰り返されるものであり、そこに理念の一般的特質が見出された。その自己規定的な原理の働きとともに、とりわけ主観的な概念のもつ構造連関が客観に体現されていることを示すために、客観が推論構造をもつという観点が生かされており、それが有機的關係性が成立するかどうかを決める基準となっていた。

しかし生命が論理的生命であると主張されようとも、理念が実在性を含む以上、その論述は自然哲学における有機体の論述との競合を完全に避けることはできないということは、認めざるをえないと思われる。そもそも理念を論じることを止めるということは、たしかにヘーゲルの観念論のプロジェクトを放棄するに等しいと考えられる。それゆえ実際上は、生命の実在性の側面にどのような内容を取り込むかという点が問題となるしかない。

生命の適用範囲という第二の問題については、自己規定的原理や推論構造が客観に即して示されることで、客観性において扱われた機械的客観や化学的客観がすでにそうであったように、一般に生物ではない対象も潜在的には生命と呼ばれうるようになっていた。そのために、論述に見られるモデルの選択についても、アドホックな取りあげ方がなされていたと言える。つまり、客観性の機械的關係と化学的關係においては『論理学』の論述上は自然領域と精神領域、目的論的關係においては精神領域が明示的に射程にあがっていたが、三つのすべての関係について両方の領域を対象とすることが分かった。同じく生命の理念においても、実際の論述は動物の生命だけを対象とすることで間に合わせていたとはいえ、それ自体が論理的生命であるのであるから、生命は自然領域と精神領域にまたがって、自己規定的原理や推論構造をもちうる対象に適用可能であると考えられていることは疑いない。

第三の問題として生命と認識との関連性については、客観性から生命の理念そして認識の理念へと展開されることを全体として見るなら、機械的關係と化学的關係という名称が自然領域の關係であることを強く印象づけているし、外的合目的性の關係が『論理学』外の論述を参考にすることで動物にもつまり自然領域にも妥当することを受け止め、そして、生命の理念の論述が、論理的生命であるというよりは、実際には動物的生命という特殊な生命形態を自然領域から取り上げていることをそのまま受け止めれば、自然から自然の内なる生命をへて認識の理念における精神へという脈絡が見えなくはないであろう。しかし残念ながら、そのモデル選択の偶然性と適用範囲の限定性によって、論理的生命を論じるという本来の意図は果たされていないと言わざるをえないであろう。

### 略号一覧

- GW: G.W.F. Hegel, *Gesammelte Werke*, hrsg. im Auftrag der Deutschen

Forschungsgemeinschaft, Hamburg: Felix Meiner, 1968ff.

- GW8: GW. Band 8. *Jenaer Systementwürfe III*. Unter Mitarbeit von J. H. Trede hrsg. von R.-P. Horstmann.

- GW9: GW. Band 9. *Phänomenologie des Geistes*, hrsg. von W. Bonsiepen und R. Heede.

- GW10: GW. Band 10. *Nürnberger Gymnasialkurse und Gymnasialreden (1808-1816)*, hrsg. von K. Grotzsch.

- GW12: GW. Band 12. *Wissenschaft der Logik. Zweiter Band. Die Subjektive Logik oder Die Lehre vom Begriff*, hrsg. v. F. Hogemann und W. Jaeschke.

- Enzy1: *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1817)* aus GW. Band 13. *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1817)*. Unter Mitarbeit von H.-Ch. Lucas und U. Rameil.

- Enzy2: *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1827)* aus GW. Band 19. *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1827)*, hrsg. von W. Bonsiepen und H.-Ch. Lucas.

- TW: G.W.F. Hegel, *Theorie-Werkausgabe*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, hrsg. von Eva - Moldenhauer und Karl Markus Michel, 1969.

- Enzy3: *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830)* aus TW8-10.

- TW1: TW. Band1. *Frühe Schriften*.

- TW6: TW. Band6. *Wissenschaft der Logik II*.

引用に当たっては、寺沢恒信訳『ヘーゲル大論理学』以文社、1999年、檜山金四郎他訳『ヘーゲル エンツユクロペディー』河出書房、1968年を参照した。